

つなぐ・つながる

研究推進部長 丹生 憲一

今週は1学年、2学年ともに校外の人たちとつながる機会がありました。火曜日には丹 BAL 台湾で、治平高級中学校、台南第一高級中学校とオンライン交流を、水曜日には丹 BALI で、地域の魅力をおすすめ第4弾を開催しています。コロナ禍で、台湾では3か月以上休校が続き、自宅学習を余儀なくされる中、1学期に計画していた第1回の交流は中止せざるをえなかったのですが、ようやく対面授業が始まった両校のみなさんと話せてよかったです。また、講師の皆さんからは「緊急事態宣言延長を受けて、学校への出入りも厳しくなったのではないですか」と心配の声はありましたが、今学期初のおすすめを実施することができました。「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」はその名の通り、地域のみなさんと共に活動して学ぶこと、さらにはローカルからグローバルへ…海外のみなさんとも共に活動することによって成長していくことが狙いです。欲を言えば、実際に海外へ飛んでいければ言うことはないのですが、今できる最大限のことをしていくつもりです。

丹 BAL 台湾 9月14日（火）

丹 BAL 台湾は、一回目のオンライン交流。授業に先立って、台南第一高級中学校とは開会のセレモニーが行われました。本校からは大垣喜代和校長先生と、生徒を代表して、本庄海陽君が英語であいさつをしました。台南第一は来年4月に100周年を迎えます。校長先生の挨拶ではそのことを祝い、両校の発展、友好関係の継続が祈念されました。本庄君のスピーチ本文を掲載します。

Hello, everyone. My name is Kaiyou Honjo. This time, I would like to say hello on behalf of Kaibara High school. Thank you for the video you gave me back the other day. We are all very interested in Taiwan. The relationship between Taiwan and Japan is very good now. So we're looking forward to having a good relationship with each other. Let's build a good relationship and have a good time with you all from now.

Thank you.

交流が始まると、タブレットの画面越しにはありますが、英語（日本語、筆談）で活発なやりとりがなされ、インスタグラムのアカウントを交換したり、画面の写真を撮ったり、終始笑顔が溢れていました。…地域紹介ビデオの感想までたどり着いたかはわかりませんでしたが、好きなアニメのキャラクターを見せ合い、好きな歌を流して「知ってる！」と反応している様子から、少なくとも文化交流はできていたように思われます。終業のチャイムが鳴ると、名残惜しそうに手を振っていましたが、これでお別れではなく、11月にもう一度交流します。次回、本校は「防災」、治平・台南第一は「コロナ禍」をテーマに調べた内容について共同学習を行う予定です。個人的にアカウントを交換した人たちは、それまでの間にもやりとりする機会はあると思いますが、さらに次元の高いところで話し合いが行われることを期待しています。

…とはいえ、オンライン接続にはトラブルがつきもので、残念ながら、最初から接続できた班は少なかったようです。申し訳ありませんでした。各教室の先生方にサポートしてもらい、何とかつながったところもあれば、最後までつながることが出来なかった班もありました。その多くは機器や通信速度の問題であったと思いますが、次回までには通信環境を今一度確認して、スムーズな接続ができるように努めます。また、交流を持てなかった班は、2週間後にもう一度、交流機会をもちます。治平高級中学校から「交流時間が短かったので、もっと話したい」というリクエストがあり、それらの班にも再度交流時間をもつことにしました。



丹 BALI 9月15日(水)

丹 BALI の時間では、上記の通り「地域の魅力をおすすめ分け」第4弾を行い、外部講師の方々に、夏休みに行った活動、フィールドワークの報告をしました。その中で「私達が考える地域の魅力」について理由を付けて説明すること、その魅力が抱える「課題」を考えて伝えること、客観的・数値的データを添えて説明すること、(可能なら)SDGsとの関連を考えること、今後の展望を示すことを課題としていました。どの班も用紙に、箇条書きで発表内容をまとめて示しながら一生懸命説明しました。

今回、残念ながら都合のつかない講師の方が多かったので、各教室1~2人で順に報告を聞いてもらう形となりました。それでも、前回までと比べると頭の中で考えていただけのことが、実際に現地に行ったり、人と会ったりしたことで目に見えるものとなって、報告者の顔にも自信がうかがえます。それに対して、思いもよらなかった指摘や質問がされ、厳しい助言があったかと思えますが、否定されたわけではありませんので、気を落とさないようにしてください。「まだまだ伸びしろがある」と温かい言葉をいただいています。

授業が終わってからの振り返りの会では、「フィールドワークに出かけた班は、具体性が増して、前よりも加速的に進んでいる」「自分たちがやりたいテーマ、問いがあいまいなところが多い。問いの立て方が課題」「高校生ならではの視点、若者にしかできない発想での取り組みに期待したい」という感想をいただきました。その中で話題にあがったユニークなテーマに、「細見綾子さんを朝ドラの主人公に」「丹波市春日町の水質」というものがありました。特産品や観光を取り上げた班が多い中で、地元出身の俳人に着目し、しかもドラマ化するというアイデアや、なぜ、柏原でも氷上でもなく春日町の水なのか？という意外性を「面白い」と言っておられました。「細見綾子さんについて」「丹波の水質」だけなら目を引かなかったのかもしれませんが、「朝ドラの主人公に」「春日町(に限定)」という視点が「あれ？」と思わせたのでしょうか。他の班の人たちも、黒豆、小豆、栗でもみんなが目を向けられないような角度を加えることで、ユニークなテーマに変えることができるかもしれませんね。

講師の方々からの助言を簡潔に伝えておきます。

柳川さん：お菓子を作りたいと思えば、実際に作ってみるといい。失敗するかもしれないが、「失敗は成功のもと」というように、思い通りいかないことも経験になると思う。思い切ってやってみてほしい。

吉竹さん：具体的に考えよう。「伝え方」よりも、誰に伝えたいのか？エビデンスはあるか？を考え直そう。フィールドワークで、予想と違う情報を得て、自分たちは間違っていると思っている班へ。不正解はない！ポジティブに考えてほしい。

田中さん：自分から助言というより、生徒に教えてもらう気持ちで質問、助言をした。質問されて答えられないと「自分がわかっていない」ということがわかると思う。自分が本当に調べたいことは何か？「問い」をもっと広げていければよい。

白川さん：誰が、誰に紹介しているのか？話している人の顔がわかるような文章で表してみればよい。目的が決まった班は、加速しているように思われた。自分たちの経験だけでは浅くなるので、専門の先生方の知恵を借りることも必要だろう。

鴻谷さん：フィールドワークや取材で話を聞いて、ますますテーマがわからなくなった人たちもいる。「なぜ」を繰り返して、最後に出てきた問いを探究することが大切だろう。面白いテーマもあるので期待している。

